# 第６回　仙台市交流人口拡大推進検討会議　議事録

日　　時　令和５年１２月２７日（水）　16：00～18：00
会　　場　仙台市役所本庁舎８階　第四委員会室
出席委員　吉田会長、吉田会長、石川委員、岩松委員、梅原委員、今野委員、佐藤委員、紫冨田委員、髙澤委員、高橋委員、中村委員、橋浦委員、林委員、山崎委員
欠席委員　なし
事 務 局　仙台市文化観光局長、文化観光局次長、観光交流部長、観光課長、観光課企画調整担当課長、誘客戦略推進課長、東北連携推進室長、東北連携推進室東北連携推進担当課長
議　　事　強化していくべき施策について

**■議事「強化していくべき施策について」**

**吉田会長**
　会議に先立ち、要綱第５条第４項に基づき、会議は公開としたいがよいか。

**委員一同**
　異議なし。

**吉田会長**
　それでは会議は公開とする。では次第に沿って進行していきたい。「強化していくべき施策について」について、事務局より説明いただきたい。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**
　資料１～３に沿って説明。

**吉田会長**
　ありがとうございました。ただ今事務局から強化していくべき施策について、５つの視点でご説明いただいた。ここから委員の意見を聞いていくが、論点を絞るために３つのパートに分けて議論していきたい。
　まずは、資料１の６～９ページの取組み１「それだけで訪れる価値のある新たな観光資源の整備」について、続いて、10～20 ページの取組み２「観光事業者の高付加価値化及びＤＸの実装」から、取組み５「災害等緊急対策」について、最後に、資料の取組み項目以外に強化していくべき施策についてご意見をいただきたい。今日はどういう施策をこれから強化していくべきかについて、みなさんの意見集約をしていきたい。
　まず初めに、資料１の６～９ページの「それだけで訪れる価値のある新たな観光資源の整備」について、施策の提案等、委員の皆さまからご意見を頂戴したい。

**橋浦委員**
　仙台という観光地を訪れたときに多くの旅行者が青葉山とか温泉は意識していると思う

が、もう一つ重要な視点として、仙台の街中という１つのコンテンツ、これが抜け落ちているのではないか。資料２の⑥の図でも、魅力度・認知度では牛タンが突出していて、これをどこで食べるのかといえば街中である。食の部分であったり、街全体の魅力が目的で旅をするというのは、都市型観光という意味では、例えば東京や大阪という街は、特定の観光地によらなくても、東京や大阪に旅をするということは十分考えられる。街の魅力を高める、仙台市も商店街や定禅寺通りも含め、あるいは連続的には青葉山まで繋がっていくわけであるが、青葉山だけ個別にとらえるということではなく、仙台駅から連続した形での、街を通って青葉山に至るルート、これも含めた形で考えていかなければならないので、ここでは青葉山と温泉という二つのカテゴリーで取組みが論じられているが、街の魅力というのは、1つ独立したカテゴリーとして議論していった方がいいのではないか。

考え方によっては、青葉山も街の魅力の一部になり得ることもあって、仙台市が検討している音楽ホールの建設が仙台国際センターの横になるかもしれないという議論がされつつあると漏れ聞こえてきているが、それだけで訪れる価値のある魅力のある音楽ホールができた場合、海外の有名な演奏家が来た時に、今まで東京と大阪だけで帰っていたのが、仙台でもある程度レベルの高い演奏が聴けるとなれば、北海道から北関東含めた広域の方を集める、魅力ある観光資源になり得ると考えられるので、青葉山エリアと街中を一体化した形で議論していくことを提案したい。

**吉田会長**

青葉山や温泉という特定のスポットに加えて、街中での観光資源の磨き上げも重視すべきだというご意見であった。他に意見はあるか。

**佐藤委員**

話を蒸し返すようで申し訳ないが、そもそも王道観光地・青葉山エリアと資料にあるが、いつから王道観光地になったのか、非常に不思議に感じる。今まで本当に青葉山が王道観光地として存在し得たのか、そのあたりから検証しなければならない。また、音楽ホールは経済同友会が街中の建設を要望したが、残念ながら国際センターのとなりにできると聞いている。どうも行政が強引に青葉山を何とか開発したいという思いがありすぎて、そちらによってしまっている施策が多いのではないかと考えている。大体にして行政が主導して観光地を作ろうと思うと、成功する事例はあまり多くはないため、青葉山が前提に来ること自体に違和感がある。果たして仙台市民の方々は、青葉山を王道観光地と言えるくらいに思っていて、県外や国内外の方も親しみを持って訪れるような場所だったのか。これからそうするために行政として支援していくということであるとは思うが、もう少し議論が必要ではないかという思いで聞いていた。

**吉田会長**

青葉山エリアの観光地としての位置づけをしっかりと見直したうえで議論を進めていくべきではないかというご指摘であった。

**髙澤委員**

参考までにタクシー業界から言わせていただきますと、観光ルートを作っているが、やはり一番に来るのは青葉山～瑞鳳殿～大崎八幡宮、これがタクシーの市内巡りの王道ルートで、観光客からは一番リクエストが多い。しかし、前回も発言したように、実際に行ってみたらお城がなくてがっかりしたというような意見が非常に多い。

**吉田会長**

来る人にとっては、ある程度の期待感を持って訪れているが、青葉山で仕事をしている身としては、あまりお見せするところがなく、そういった意味では、より活躍してもらうためには、そのままではいけないと感じている。

**岩松委員**

仙台の中心市街地あるいは青葉山という話が出ているが、仙台西部という捉え方があって、アーバンリゾート地の秋保温泉だけではなくて、過疎地ではあるが、本物の温泉をたたえつつ癒しの空間に浸れる作並温泉や、静寂な稲荷の定義もあるということも、再認識をお願いしたい。「数は少なくても、地域で大切にするという価値観に賛同する、客単価を高めていき、客を一人でも多くという発想はコロナ禍でますます地域で快く思われなくなった。中国人、20代女性とターゲットを決めず、農家を守る、海と生きる、といった価値観で人を呼び込めれば、地域で知恵を絞る取り組みこそ、行政は後押ししてほしい」ということで、最適の「適」と過疎の「疎」という字を組み合わせて過疎論を唱えたある有名な学者先生がいるが、まさしく「適疎」ということで、過疎地にもしっかりと目を向けてほしい。それから、それだけで訪れる価値のある新たな観光資源というテーマに絞れば、地域おこし協力隊の募集や活動支援業務を私企業に担わせるのではなくて、市観光課やSentiaで行っていただきたい。観光コンテンツの再発掘やまちづくり、国内外への発信へつながっている成功事例は数多とあるが、そのほとんどは自治体が担っている。

**吉田会長**

作並温泉等の、もう少し拡大したルートも視点に入れてほしいということと、地域づくりの事業をてこにして、まちづくりや観光の隆盛をはかってほしいという意見であった。青葉山に行っただけだと、一日で帰ってしまうので、できれば何日も留まっていただくためには、幅広く回っていただく、そのためには交通や案内の整備も必要だと考える。

**林委員**

資料２の⑥のグラフは右側に行けば認知度が高く、上に行けば満足度が高いということであるが、こういったものを見ていくと、どういったものに力を入れていけばいいのかということが見えてくるのではないか。作並温泉や定義山、三角油揚げも、魅力度が高いと言えるエリアに位置していて、仙台の街の魅力というものをもうちょっと深堀する必要があるのではないかと考える。例えばアーケード街でも、シャッター通りになっていなくて、あれだけの賑わいがあるところは他にあまりなく、一番町も日々努力されているということが商店街にも見られて、そういったところをもうちょっと磨き上げれば、さらに光

るものがあるのではないか。観光的な目線を持って、例えば大学には日本全国から学生が集まっているところもあるので、そういったところもツールにして、仙台の魅力はどんなところなのか、ヒントや知恵をもらうことも良いのではないかと考える。また、青葉山にしろ、広瀬川に非常に近くて、そういった魅力のあるところが近くにあるということも、他にはないところかもしれないので、自然もうまく活かしながら、持続可能な開発や掘り下げ、磨き上げというものを充実させていけば、仙台の魅力を発見・発信できるのではないか。

**吉田会長**

ご指摘のあった資料２の⑥の図は、横軸が認知度で、縦軸が満足度であるから、右上の牛タンが、認知度も高くて満足度も高いという、ベストヒット商品ということになる。右下にあってはいけなくて、認知度が高くて満足度が低いというのは、有名だから行ってみたら大したことなかったという、いわゆるガッカリ観光地である。左上にある赤枠部分をいかにして右へずらしていくか、認知度を上げていくかということが重要である。また、学生の利活用についてもご指摘いただいたが、私も観光経済学の授業をやっていて、毎年学生にツアーを提案させるのだが、廃墟ツアーであったり、ラーメンツアーであったりといった、大人が考えないような提案が出てくる。そういった新しいアイデアを取り入れるのも良いのではないかというご意見であった。

**山崎委員**

観光という切り口と、我々の商店街がどのように関われるのか、今テーマとして取り組んでいることが２つあって、１つは市役所に近い４丁目商店街の取組みである。ここは駅からは一番遠いのだが、中身を考えるとそれぞれの店のポテンシャルが下がってしまっていて、協議会として４丁目エリアでもう１回、消費者や市民、あるいは観光客が楽しんでいただけるようなコンテンツをつくれないだろうかという作業をやっている。その前段として、データ分析をやろうと思っている。今までは定点観測による通行量という観点で賑わいを議論していたが、コロナを経て、人出は少し戻ってきていて、クリスロード商店街は２～３万人/日、土日のイベントがあるときは５万人/日くらいで、数は良いのだが、問題はどういった人たちがどういった行動をとっているのかということで、今データを取っているところである。

現在、駅前がいろんな意味で変化していて、これをチャンスととるかピンチととるかが大切で、藤崎界隈やさくらの跡地、EDEN や読売ビル等の大型物件に動きが出ている。中心部の商店街の連携という中で、今までの時代であれば、そちら側の資本で何か仕掛けていただいて、商店街としてはいわば城下町といった形で商売が成り立ってきたが、今は消費動向が全然違って、そういうものの魅力はどういう形で商店街の活性化につながるのかというテーマが重くのしかかっている。

もう一つの視点は、やはり駅を基盤とした回遊性が課題であると認識しており、例えばクリスロード商店街は、通行量は維持しているものの、そこから人の流れも含めて、一番町というブランド力が高かった商店街が非常に苦戦している。そういった努力をしておかないと、今日のテーマである、交流人口を拡大していったときに受け皿として街の魅力を

出し切れないということが出てくるので、準備をしっかりとした上で、観光という視点でお客様に楽しんでいただくエリアの提供を目指していきたいということを考えている。

**吉田会長**

仙台駅前から大きく街並みが変わっていく中で、今までと同じようにしていていいのか、交流する空間としては非常に重要なことであり、お客さんの通り過ぎる人数、量の観点から質の観点を見据えた対策に力を入れているということであった。

**中村委員**

仙台の魅力というのは、青葉かおる並木道、青葉通りや定禅寺通りを歩いて、ショッピングであったり、いろんな人との触れ合いであったり、牛タンのお店もあり、麻婆焼きそばみたいなものもあり、といったところを一体的に感じることができるということだと考える。しかし、それだけで訪れる価値のある新たな観光資源の整備というテーマで話をしているので、資料２の⑥グラフの赤枠部分の認知度を上げることも重要であるが、今後は新たな魅力になり得るものを、少し時間をかけて作っていく必要があるのではないか。

**吉田会長**

新たな観光資源をつくるのは非常に簡単なことではない。今あるものを活かしきれているかという問題もある中、オンリー仙台、仙台に来なくてはダメだと、他の観光地よりも選んでもらえるような、突出したものがないといけないということや外国人対応のことも考えると、新しい観光資源も重要だということで、ご意見を伺っていた。

**梅原委員**

現場にいて、お客様に仙台の魅力を伝えることがすごく難しいと感じている。お客様から「どこを観光したらいいですか」という質問に答えづらい部分がある。この会議で新たに観光資源を生み出す必要があるのではないかといった議論がされているが、そもそも今の観光に対する予算がいくらで、どのくらい足りないのか、それに対して優先順位をつけて何をやっていくかっていうことをはっきりさせないと、あれもやりたい、これもやりたい、というのは本当にその通りではあるが、やはり優先順位をつけて、長期的なこと、中期的なこと、即やらなくてはいけないことをはっきりさせて、それにどのようなお金の使い方をしていくかっていうことを考えないと、財源を確保するにも、はっきりしたものが見えてこないのではないか。新たな観光資源といっても、それが全国的、世界的にどう評価されるのかという部分も重要になってくる。例えばお城であっても、歴史があって、初めて価値が出てくるものであって、今新しく仙台城を造ったとしても、仙台に行こうといったときに、それが果たして全国的に評価されるものなのかというところまで踏まえて、考えていく必要があるのではないか。

**吉田会長**

仙台の魅力を伝えづらいということで、どきっとするような、反省しなければいけないご指摘であった。予算の裏付けを見た上で優先順位を考えた施策ということで、効果と効

率という視点で考えると、何か施策を進めれば効果は出るが、投入した予算に見合う効率性があるかということは、限られた予算を使うという中で重要な論点である。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**

様々なご意見を頂戴し感謝申し上げる。青葉山については、観光動態調査の結果を見ても一番人が訪れているエリアということで「王道観光地」としているが、政策的な面でも、青葉山エリア文化観光交流ビジョンというものも作っていて、さらには観光的な視点だけでなく、交流人口拡大という意味ではＭＩＣＥという点でも重要なエリアであるので、いかにしてそこに人を呼びこむのか、また中心部の街の開発の動きもあり、アーケード街とかも街歩き観光という点で重要な資源であるので、回遊性や青葉山から中心部まで含めた面的な視点で検討していきたい。

また、優先順位というご意見もいただいたが、まず本日は逆に「何に力を入れていけばよいか」ということをご意見いただいた上で、優先順位付けや既存の施策の見直しをしていきたいと考えているので、「こういった取組みがあった方が良い」といったところを、予算等の問題は抜きにしてご提案いただければ、と考えている。来年度に新たに戦略を更新していくタイミングでもあるので、何に力を入れていくべきか、率直にご意見をいただきたい。

**吉田会長**

今日の主眼は、どちらに向かって走っていくか、かつ何を優先的にやっていくかということに関しての意見集約ということである。私が感じたのは、もっと認知度を上げる施策、資料２の⑥の図でいえば右にずらしていくような施策が重要ではないかということである。他には、街の内部を充実させていく、ということもあろうと考える。時間に限りがあるため、次に進んでいきたい。資料１の 10～20 ページの取組み２～５について、ご意見を頂戴したい。

**岩松委員**

取組み４に関して、広域周遊強化の「広域」とは東北一円を指しているようであるが、まさしく新幹線で東北を周るというようなところで、ローカル線はシャワー効果がないようなプランが非常に多かったと思っている。例えば七夕祭りもそうだが、夏祭りの初日か最終日にお客様を仙台に下ろして、名掛丁あるいはクリスロード商店街を藤崎まで歩いて、折り返して新幹線に乗る、こういったパターンが最近は非常に多い。これを何とか引きとめて宿泊させるためにどうすればよいか、もうちょっと考えてほしいと思っている。

「広域」を東北一円と捉えるのではなく、仙台市内として捉えていただきたい。すなわち、東部沿岸部・旧仙台市街・西部地域の各エリアを、青葉祭りやジャズフェスのときに、有機的に結合させるような取組みをするべきであると考えている。それによって仙台にお金が落ちることになるし、仙台市内を周遊してもらうためにも、３つのエリアの間断なき連携事業を推進するために、月次会合を持って意見交換していくことが必要である。また、シティホテルにもパンフレットを置かせていただいているが、最近だとその効果もあってか、今まで見なかった海外観光客が宿泊するようになった。シティホテルと秋保・

作並の連泊プランを推進するために、こちらも同様にシティホテルと秋保・作並の旅館とのミーティングや懇談会等の情報交換の場を設けて、お客様のニーズを把握しながら連泊プランの造成を進めていくようなことも必要ではないかと考えているので、提案したい。

**吉田会長**

２日間で温泉とシティホテルの両方に泊まることは東京ではできないことであり、非常に面白いのではないか。

**林委員**

同じく取組み４の「広域周遊強化」に関して、先ほどは東北一円ではなく仙台市内を広域的に捉えるという意見があったが、名取市や多賀城市をはじめとした仙台市の近隣の市町村との連携も大切であると考える。作並の隣は山形市になるが、仙山交流も含めて強化しつつ、連泊はこれからのインバウンド施策の課題であるので、ホテルと温泉とを楽しんでいただき、ゆっくりと東北の良さを知ってもらうというような働きかけをしていければと考えている。

余談にはなるが、マレーシアからのチャーター便が５泊６日の旅程で、山形と岩手に１泊ずつ、仙台市内に２泊、秋保/作並/松島の温泉街に１泊というプランで 280 名×４往復来ている。ちょうど本日も入ってくる予定であるが、先週までは光のページェントがあったので、非常に好評であった。資料２の⑥のグラフにあるように、認知度は低いが非常に満足度の高いイベントであり、これから来る方たちは見ることができないので、せめて２月くらいまでやってもらえれば、かなりナイトコンテンツとしては大きいと実感している。そういった実際の反応を見ても、まだまだ素材はあるという印象である。

**岩松委員**

先ほど２点、民間による３地区の月次会合やシティホテルと温泉地の連泊推進プランの造成という提案をしたが、これらは新たな財源を求めなくてもできるものであり、まさに今からでもできる話である。民間側からみんなで話し合って魅力を創り上げていこうという提案であり、新たな財源がなくてもできるということを強調させていいただきたい。

また、仙台市 2020 年以降にできた高級ビジネスホテルがダイナミックプライシングを導入していて、そのことについて批判を受けているようだが、我々はシティホテルとしっかりとタイアップして、そういったお客様を我々の方に誘導していただけるような方向に持っていければと考えている。仙台市の魅力を半減させるようなダイナミックプライシングに応じさせない取組みも必要ではないか。

**吉田会長**

地元の民間企業が連携して、立ち上がっていこうということは非常に良い取組みである。この会議を契機に、ますます問題意識を共有していただければと考える。

**紫冨田委員**

取組み３の「ＭＩＣＥ推進」に関して、「ＭＩＣＥ誘致インセンティブ強化」と「アフ

ターコンベンション環境整備」とあるが、仙台のＭＩＣＥ関係者がかねてから心配しているのは、2025 年問題である。仙台国際センターが 2025 年の４月から 2027 年の 10 月まで改修工事に入るということで、普段だったら大きな会議を国際センターと萩ホールを使って、といったメインになるところが使えなくなるということは、非常に厳しいと考えている。例えばこの期間に、仙台サンプラザホールやせんだいメディアテーク、市民会館等の複数の会場をつないで使って、大型の会議を受け入れる工夫をしないと、大型会議の仙台飛ばしに合ってしまうのではないかということを非常に心配している。

仙台国際センターの展示ホールを講演会場に使ったらいいじゃないか、と思っても、座席の設営をしなければならないため、プラスアルファの経費がかかるし、複数の会場を廻るとなると、シャトルバス等の経費がかかる。それに加えて、国際センターと萩ホールだけであったら、窓口を一本化して予約できたが、複数の施設を使うとなると、同じ時期に多くの施設の予約をとることになり、各施設も元々の定例の催事もあるはずであるから、調整が非常に困難になる。仙台市としても、様々な検討をしていると思うが、東北大学をはじめ、地元の主催者は何としても仙台で開催したいと考えていらっしゃると思うので、それを地元全体として受け入れる必要があるのではないか。

先ほどピンチをチャンスに、という話もあったが、これをチャンスと捉え、国際センターだけで開催した場合は、地下鉄で行って、すぐ帰ってしまっていた人たちが、回遊せざるを得ない状況になるので、その回遊を少しでも快適にできるように地元全体で取り組めば、改修が終わった後も、仙台ではいろんな会場を周った会議もできるという新たな仕組みができるのではないかと考える。例えば移動の途中で、会議に関係した昼食を提供したり、小さな展示会場を設けたりといったことを、地元全体で取り組むことが必要である。

東京の例であるが、大きな会議の併催の大規模展示場が足りない、となったときに、周辺の複数の施設を使って、少しずつテーマを変えた展示を行い、そこを周っていただくような工夫をして、たくさんの参加者を受け入れることができた。このように、2025 年問題はＭＩＣＥ関係者としては非常に大変ではあるが、逆にこれをチャンスと捉えて、地元の皆さんと一致団結して、とにかくＭＩＣＥ関係者が仙台で会議をするんだ、といったような取組みを行うことが必要ではないか。

**吉田会長**

国際センターの改修という課題のご指摘であった。東北大学は学会を引っ張ってくる立場であり、川内や青葉山には土日は使っていない教室がたくさんあるので、国の財産を有効に活用いただければ、と考えている。こういったことはバラバラにやるのではなく、誰かが一本筋道を引いてあげないと、空いてないから会議はできないか、となってしまって、我々も学会を開こうか、というときに、国際センターが使えないから別の地域でやってください、となってしまっては残念である。

**紫冨田委員**

追加になるが、群馬県で学会をやったときに、会議本体は市内で開催したが、終わった後の若手研究者のための合宿を、伊香保温泉でやったときは非常に好評だった。そういったアフターコンベンションではないが、サテライトの会議を温泉地でやるということもご好評

頂けるのではないかと考える。

**中村委員**

取組み２のＤＸ推進という部分に関して、ＤＸは日本全体で見ても、他の国に比べるとまだまだ遅れている。その中でもキャッシュレス決済は、インバウンドをこれから増やしていく中では最大の課題であると考える。当然、各事業者でも様々な事情があってなかなか踏み切れなかったり、コストの問題があったりすると思うが、新たな財源が確保できたのであれば、仙台を日本全国の中でも一番のＤＸ進化都市にするくらいのことを考える必要がある。海外から来られる方のストレスをなるべく減らす、あるいは他の都市と比較して、仙台は本当にそういうところが進んでいるな、この１～２年でずいぶん変わったな、というところを見せていくことが必要なのではないか。

そういうことは、新たな財源が確保できたときの、市民に対してのわかりやすさということにもつながっていくのではないかと考える。

**吉田会長**

ＤＸ、特にキャッシュレス決済の導入が進み、スーパーデジタル観光地のようになれば、話題性もあるのではないかというご意見であった。

**橋浦委員**

取組み２のＤＸ推進に関連して、街でＤＸが発達している状態、観光で仙台を訪れた人がＤＸの使い心地が良いと感じている状態というのはどういうことかを考えると、日ごろから街の機能がＤＸ化していることが大事であって、観光客だけでなく、仙台を訪れた人や仙台に住んでいる人も便利でなければならず、観光客だけが便利であるということはあり得ないため、そういう意味では、トータルでＤＸに強いまちづくりということが求められるのではないか。

また、取組み４の閑散期対策に関して、閑散期対策としてのコンテンツという項目があがっているが、コンテンツという議論は閑散期以外のところでもした方が良いと考えている。現状で行っているお祭りやイベントをもっと盛り上げるためにはどうすればよいか、ということももちろん大切であるし、先ほどの光のページェントの話でも、昔はかなり長い期間やっていたり、青葉通りでもやっていたりしていた。要はお金がないから、手弁当でやって、一般企業にも支援を依頼して何とか維持してやっている状況にあるところに、まずはきちんと予算をつけてあげることが大事である。

もう一つは、ベンチマークの都市として福岡が挙げられると思うが、ナイトコンテンツの充実というところで、国分町を中洲化する訳ではないが、単純に福岡にあって仙台にないものとして、福岡にとってのキラーコンテンツとも言える「屋台」がある。これは観光当局と衛生当局間での検討が難しいのかもしれないが、ちょっとした規制緩和で新世代屋台というか、ある程度衛生面を確保した上で、屋台や食べ歩きというものを街中で展開していくことによって、普通だったらここまでは来ないけど屋台があるから行ってみよう、というような動線の延長化もできるのではないか。あるいは、仙台の商店街は閉店が早いが、海外から来る人は夜に出歩く人が多いので、台湾の夜市のようなことができるよう

に、衛生当局と検討しても良いのではないか。規制緩和だけでできるものもあるかもしれないし、コンテンツとしての工夫というのは、お金がかからないという訳ではないが、昔は仙台にも屋台があったが、そういったことも再び考えていきたい。

また、長崎と広島のキラーコンテンツとして原爆関連の施設があるが、仙台にも震災遺構があって、これが資料の中に載っていないのが少し残念に感じている。震災遺構の荒浜小学校は、行ったことがある方はご存知と思うが、多くの人に見てもらいたいと思えるような施設である。今のままでは少し物足りなさがあるので、海外や他の地域から来た方が震災の恐ろしさを実感でき、かつ我々がこの震災をどのようにして乗り越えてきたのかをアピールできる絶好の場とできるよう、もっと洗練させていくべきである。この荒浜小学校は、本当に差別化されたユニークなものであって、他の大都市では絶対にあり得ないコンテンツになり得るものであるため、これを活かさない手はない。防災環境都市・仙台を謳っている以上は、荒浜小学校のような震災遺構は、コンテンツの一つとしてしっかりと取り上げていくべきである。

**吉田会長**

観光客以外の来訪者や居住者にとっても使いやすいまちづくり、閑散期以外のファンダメンタルなコンテンツの充実ということで、事例としては福岡の屋台や、長崎・広島の原爆遺構に匹敵するようなローカル資源の磨き上げ等のご指摘であった。

**髙橋委員**

仙台にはいろんな魅力があるが、仙台の人々は情報発信が上手くない。自分が初めて仙台を訪れたときは牛タンのお店は１軒しか無かったが、今は非常に多くの牛タンお店があり、仙台といえば牛タンと言われるまでになった。やはり洗練すること、今ある素材をしっかりと磨き上げることが大切で、それをいかにして外へ発信するかということが重要である。光のページェントや青葉まつりも、仙台市民のためだけではなく、青森のねぶた祭りのようにホテルが取れなくなるくらいまで、ＳＮＳ等の様々な手段を通じて発信していく必要があるのではないか。

仙台市と宮城県が一体となって取り組んでいく必要がある。北陸新幹線が開通した際に、石川県と金沢市はそれぞれの首長が一緒になってタイアップして、とにかく石川県に観光客を呼び込もうと PR していた。仙台は住みやすい街に新幹線も通っていて、都心からも 1 時間 30 分で来られる。市街地から少し離れるだけでたくさんの緑があふれていたり、そういった魅力をもっと表に打ち出していく必要がある。もちろん、整備していくことも必要だが、作るだけで終わるのではなく、しっかりとそれを活かしていくことが重要である。

**吉田会長**

近年の情報発信やマーケティングに関しては、昔ながらの紙媒体ではなく、ＤＸ化に対応させていかければならず、例えば動画であればスマホで見るために縦型にしなければ、伝わりにくくなってしまう等、工夫が必要である。ある企業の人事関係者からは、「東京や関西の学生は自己ＰＲが上手いが、東北大学の学生はキャラクターをもっと確立させた方が良

い」と言われたことがあるが、そういう観光発信を目指していくことも必要ではないか。

**岩松委員**

岩松旅館として地域おこし協力隊を募集しているが集まらない。地域おこし協力隊は新たな財源を求めなくてもできるので、その報酬と活動支援業務を、ぜひ仙台市観光課やSentiaで行っていただきたい。

**吉田会長**

地域おこし協力隊でＰＲが期待できるものの、なかなか集まらないとのことなので、ぜひ報酬等の支援をいただきたいとのご意見であった。

**庄子会長**

仙台市で提供していくべき観光コンテンツは、ターゲットごとに異なるのではないか。他都市と差別化できる一つのコンテンツとして、やはり震災コンテンツが挙げられる。現在、高校や中学で探求型学習というものが始まっていて、東京首都圏の進学校が、昨年は東北地域研究として３泊４日で宮城県に240名で来ていて、班に分かれて自分たちでテーマを決めて行き先を選び、取材をしてテーマに基づいた調査結果をまとめるといったことをしている。宮城県が選ばれる理由は震災遺構があるからであるが、もちろん学習以外の観光を楽しむ部分も含まれている。差別化のポイントとして、数は少なくても打ち出していくことは大切だと考える。若い中学、高校時代に来てもらうことも非常に重要である。

インバウンドについては、来年、東北地方も必ず増えると見込んでいる。東アジア以外の欧米豪からの来訪者が東北地方で増えているが、福島・岩手が2019年比でプラス20%に対し、宮城県は残念ながらマイナス10%と、明暗が分かれてしまっている。分析としては、福島や岩手は街歩きとか座禅といった、体験型のコンテンツに非常に力を入れていて、宮城県や仙台市ではまだそこが弱いと感じている。特に欧米豪の方々は滞在期間や消費単価も高いので、体験型コンテンツを磨いていく必要がある。

東北の方からすると、やっぱり仙台は都市観光であると感じている。都市観光とは街全体が魅力的であるということで、何か一つの目的で来ているわけではなく、仙台というブランド力を持って人が来ている。街全体が魅力であるというと、長期的な視点にはなるが、歩いて楽しい街、ウォーカブルな街を街の再開発と一緒につくっていくということを、必ず取り組んでいく必要がある。

市民が何を楽しんでいるか、これが最大の観光コンテンツになる。市民の楽しみをそのまちづくりの中で増やしていくことが大事である。

最後に、コロナ禍やウクライナ情勢等の影響による物価上昇で消費が落ち込んでいるが、唯一上がっているのがトキ消費である。「今だけ」「あなただけ」「ここだけ」といったトキ消費は、ライヴやフェス、コスプレといったイベントに対して、若い人たちを中心に非常に消費意欲が高くなっている。トキ消費には「貢献性」といった、自分が応援したいというニーズが非常に強いので、例えば既存の光のページェントとかも、短い期間で終わらせないためにも、支えてもらう、観光客の方にも金銭面も含めて支えてもらえるような仕組みを整えられれば、参加型で貢献もできるコンテンツとして、また新しいステージ

を迎えられるのではないかと考える。

**吉田会長**

そろそろ時間も迫ってきているので、今まで議論してきた取組み以外で、その他として入れてほしいという事業があればご提案いただきたい。

**岩松委員**

いろんなお話が出ているが、令和2年2月6日に開催した第3回仙台市交流人口拡大財源検討会議の資料2のアンケート結果に網羅されているので、ぜひ委員の皆さまにもう一度ご覧いただきたい。

今日の会議の資料3の3ページと4ページに、施策と金額が出ているが、この金額はどういった数字なのか。

**事務局（高島次長）**

予算額である。

**岩松委員**

過去の数字なのか。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**

今年度の予算額である。

**岩松委員**

例えば３ページに西部地区等観光地域おこし協力隊　4,800万円と記載があるが、これは実際に使ったのか。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**

予算額として確保している金額で、採用が進んでいるところには充当していて、残っている分は使わずに残している。

**岩松委員**

秋保地区交流人口拡大推進　669万5千円というのも使われたのか。4ページ目には西部地域における受入環境整備3,358万7千円とあるが、これは何に使われたのか分からないので、もしよろしければ、後日で良いのでご説明をいただきたい。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**

今ご指摘いただいたものには、観光施設の維持管理等も含まれているので、内訳について改めて情報提供させていただく。

**髙橋委員**
　これは来年度の数字ではないのか。

**吉田会長**
　2024とあるが、2023年にやったのか。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**
　2024は戦略の名称であって、ここに掲げている事業は今年度の事業を掲載している。

**事務局（高島次長）**
　2024年が最終年で、その最終年に向けて、今戦略を動かしているということである。

**吉田会長**
　では第３回のアンケートの資料も振り返ることができるようにしていただきたい。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**
　承知した。

**吉田会長**
　今日の議論としては、施策のエリアについては、青葉山に集中したものではなく、街中や仙台郊外を対象としたものも体系化する視点や、域外への発信（広報・ＰＲや認知度アップの取組み）の充実、特定の観光スポットに依存しない体験型コンテンツの造成等が必要ではないかという意見をいただいた。これまでの議論を踏まえて、次回検討すべき論点について、委員の皆様よりご意見をいただきたい。

**梅原委員**
　大変複雑な感情を抱いているが、やはりその財源をどうするかという話をする場面になってきている。宿泊税という話が当然出てくると思うが、何をしたいかという話をするときに、私たち宿泊事業者は「今議論していることは、宿泊税を財源とする事業であろう」という考えがあると、うまく答えられないでいる、ということが正直な思いである。そろそろ次回の会議では、どれぐらいの予算規模で、どれぐらい財源が必要で、それをどのように集めるのか、という議論をしないと、進めていきづらいのではないか。

**吉田会長**
　今日は財源にこだわらず、まず何をすべきか、比較的オープンに議論しているが、無尽蔵になんでもやります、という訳にはいかないので、次回は宿泊税のイメージを踏まえた上で、資料の提供をいただきたい。これらの施策がどこまでできるのかということを考えた上で、先ほど優先順位という話がでたが、効果的・効率的なところから取り組むべきである。基本的には旅行者の方からお金をいただくのであれば、当然旅行者の便益を高める事業に使うべきであるし、税金を徴収するために費用がかかり、売り上げが落ちる可能性

があるということであれば、事業者の収益に資することも十分に必要である。また、なんでもやればいい訳ではなく、限られた財源で効果があるものから取り組んでいく必要があるし、他とは違う税金を課している以上は、他の都市でも同じようにできることではなく、仙台の良さを伸ばすようなことに取り組んでいかないと説明がつかない。次回以降は財源の話も両目で見ながら、議論をしていかなければならないと考えている。

**岩松委員**

私は今日、新たな財源を求めなくても、どのように交流人口を増やしたり、仙台市の魅力を高めていくことについて提案した。そのための官製ではない、民間主導でのやり方もあるのではないかと考えての意見であるので、そこはぜひ尊重していただきたい。

**吉田会長**

財源が必要で、手当てが必要なものと手当てが必要ではないもの、そのうち、すぐにでもできるものと、調整していかないとできないもの、大体三つぐらいに大別されるのではないか。次回以降はそういった視点で分けて議論していきたい。

**梅原委員**

財源＝宿泊税ということで話が進んでいくのか。この会議では財源としては宿泊税が適当ということで一度話が進んだが、財源をどこからとるのかという話はしないで、宿泊税という方向で進んでいくのか。

**吉田会長**

宿泊税が導入されて、お金だけ取って何もしないということは許されないことであるから、観光振興ために関係者の方々で合意できる使い方を検討している。

**梅原委員**

観光財源をどうしていくかということで、宿泊者から税金を取るというところから進んでいくのか、それとも他の手段も検討していくのか。

**吉田会長**

そこまで戻って議論することは、私は想定していないが、ただ今ご指摘にあったように、お金をかけなくてもできることもこんなにあるのではないかという議論もあるので、そこは宿泊税と関係ないから議論しませんということではない。財源が必要なもの、財源がなくてもすぐできるもの、財源がなくてもできるけど行政が規制を変える等の調整が必要なものとあると思うが、最初から排除されるものではない。

**髙澤委員**

宿泊税以外の財源は考えないのか。

**吉田会長**
　先ほどご指摘のあった戦略 2024 は宿泊税以外の財源でやっている。そういったものに対して、この使い方を効率的にすべきではないかといったことは、私は議論の余地はあると考える。

**髙澤委員**
　要はここに書いてある以外の財源としては、今のところこの会議では宿泊税をメインに考えているということか。

**吉田会長**
　そういうことになる。あるいは新たな税金を導入する、借金をするっていうことはここでは考えていない。

**今野委員**
　前回欠席していたのですでに説明済みかもしれないが、この会議で議論した内容はどのように取扱われるのか。

**事務局（高島次長）**
　報告書という形にまとめて、仙台市に提出をいただき、その内容を踏まえて、仙台市としてどういう方向性で政策を作っていくのか、という流れになる。市長への答申に近い。

**事務局（金子局長）**
　財源について、宿泊税だけかという意見があったが、財源に関する資料を作成して次回会議でお示ししたい。

**吉田会長**
　財源について整理してほしいという要望があったため、次回は戦略 2024 の情報提供と合わせて、宿泊税がどういう性質で、どういう検討状況にあるのか、整理した資料をご用意いただくようにお願いしたい。

**梅原委員**
　宿泊税を取るとなった場合に、実際には現場ではどういった作業や課題があるのか、ご存知ないのではないか。仙台市には示しているので、それらもご提示いただいて、それもふまえて検討していただきたい。

**吉田会長**
　宿泊事業者も全く無風で済むわけではないということか。

**梅原委員**
　その通りである。宿泊者が納める税金といえども、例えば、現在ではオンライン決済は一

般的になってきているが、これで宿泊税も徴収すると、手数料が徴収されるため、ホテル事業者の負担になってしまう。そういった現状もぜひ知っておいていただきたい。

**吉田会長**

　そういった部分を積み残しにしたまま、交流人口拡大のためだといって議論を進めても現場は混乱してしまうというご指摘をいただいた。それを解決する必要があるということもみなさんに知ってもらいたいし、そういうことをわかった上で議論すべきとのご指摘であるので、そういった部分も次回以降は議題にしていきたい。

　最後に宿泊税の話が明確に提案されたが、事務局と調整をして整理しながら、情報提供を進めていきたいと考えているので、よろしくお願いしたい。それでは本日予定していた議事は終了したので事務局に進行をお返ししたい。

**事務局（渡辺企画調整担当課長）**

　１点ご連絡させていただく。次回の第 7 回検討会議は令和 6 年 1 月 12 日（金）14 時から、仙台市役所８階第５委員会室にて開催予定である。本日のご意見を踏まえ、施策を整理しつつ、先ほどご意見のあった宿泊税に関する資料もご覧いただきながら、ご議論いただければと考えているので、よろしくお願いしたい。

**司会**

　吉田会長ありがとうございました。

　それでは以上をもちまして、第 6 回仙台市交流人口拡大推進検討会議を終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。